

事業成果報告書

1. 教育委員会名 : 能勢町教育委員会
2. 研究主題 : 魅力ある学校統合事例の創出
3. 研究タイトル : 次代の能勢を担うグローバル人材の育成
～「自分が好き!」「仲間とともに!」「能勢がすき!」「夢がいっぱい」の子どもの育成をめざして
4. 研究課題 : 【調査研究Ⅰ】
ア. 統合後の学校が新たな学区の地域コミュニティの核として高い教育機能を発揮するための方策に関する研究
①保護者と児童生徒と地域との関係をしっかりとつないでいくこと
②地域の事を学び、地域の行事等参加しながら、地域の一員であることを自覚させること
③地域の願いに応える学校運営をすること
エ. 統合を契機とした魅力的な学校づくりに関する先進的な取組の研究
①能勢町スタンダードの授業を小中全教職員共通認識の上、実践する
②学習方略の研究をし、一人ひとりの学び方を支援する。(アフタースクールの小学校自主学習教室、中学校自立学習室につなぐ)
③ICTを活用した魅力ある授業を展開する

5. 事業の実績

(1) 調査研究のねらい

本調査の研究のねらいを「能勢の次代を担うグローバル人材の育成」と定め、そのねらいに沿って、学校・家庭・地域・行政が互いに支え合い町ぐるみで子どもたちをどう育てていくかについて研究を進めた。本町は今年度4月に140年以上歴史のあった6小学校2中学校を再編整備し、施設一体型小中学校「ささゆり学園」を開校した。それに伴い各地域にあった「地域の重要な拠点」の一つであった学校を閉校したため、地域と学校のつながりが希薄になるなど、再編整備をする上でこれまで地域で培い、養ってきた「地域の教育力」の低下・衰退が危惧された。また、本町は大阪市・京都市・神戸市から約1時間の距離にあり全国的にみれば利便性は悪くない町であるが、すぐに帰郷できる距離にあることから、近年特に若者が近隣の市町へ引っ越しする等、人口流出が激しく、平成17年の人口14,186人をピークに毎年減少し、出生数も40人を下回る年もあり、消滅可能性都市24位という結果もでている。そのような状況の中で、この再編整備を積極的再編整備とし、平成20年9月に「能勢町学校教育検討委員会」を立ち上げ、平成21年11月に「能勢町学校再編整備に関する基本方針」を発表した。平成24年度からは、新学校プロジェクトチームを編成し、検討を重ねた上で平成26年度末に「能勢ささゆり学園の開校に向けて」という、新学校における方向性をまとめた。それに基づき開校1年前には各校で実践、検証した上で開校をむかえた。開校するにあたって、3つスローガンを打ち出した。「①みんなの知恵と力をあわせて(ALL能勢)、②新しい時代のための、新しい発想で(NEW能勢)、③たった一つの能勢の魅力ある学校(ONLY能勢)」である。そのスローガンをもとに、能勢の地で育ったことを誇りに思い、次代を担うグローバル人材の育成をねらいとし研究を進めた。

(2) 調査研究の実施状況 (平成28年度)

9月	「秋田県由利本荘市、東成瀬村」の視察研修 運営委員会・推進会議の開催 (能勢町スタンダード・グローバル能勢等進捗状況 について)	○各教科における授業研究会 各旧小学校校区の行事へ、児童・生徒が積極的に参加するよう促し、担当教員も行事へ参加し、地域との連携を深めた。
10月	アイディアソンの報告会 運営委員会・推進会議の開催	
11月	「秋田県由利本荘市、東成瀬村」の視察研修 小中合同報告会 小中高一貫教育研究発表会 小中合同授業研究会	
12月	運営委員会・推進会議の開催(中間まとめ) アクティブラーニング授業実践	
1月	「筑波大学附属小中学校」(全国授業UD学会 研修)研究会への参加 アクティブラーニング授業実践	
2月	授業づくり研修会 大阪府豊能地区小・中学校初任者研修 ～情報教育・ICT機器を活用した授業づくり～	
3月	「筑波大学附属小中学校」(全国授業UD学会研修) 研究会の報告会 運営委員会・推進会議の開催(中間まとめ・総括に むけて)	

6. 事業の成果

(1) 研究課題に応じて設定した具体的目標に対する達成状況

ア. 統合後の学校が新たな学区の地域コミュニティの核として高い教育機能を発揮するための方策に関する研究

①保護者と児童生徒と地域との関係をしっかりとついでいくこと

・課題先進地能勢町の次代について熟議をする機会を生徒、保護者、地域の人々とともに考えるアイディアソンの実施・・・【「アイデア」と「マラソン」を合わせた造語。チームごとに課題(テーマ)を定めた上で、その課題解決に向けたディスカッションでアイディアを出し合うワークショップのこと。】

アイディアソンを実施し、その後報告会もおこなった。報告会では、能勢が日本においても人口減少・少子高齢化・財政難などいち早く課題が進んでいる地域であることなど、学びのフィールドを設定した理由を含め、アイディアソンを通して身につく力等も具体的に示した。報告会に参加していた管理職や教員は、次代を担っていく子どもたちにとって、20人を超える地域の方からの聞き取り学習や、プレゼンテーションをつくり上げ発表に至るまでの学びは重要であり、「学校においても取り組むべき内容だ」と学校における今後の取組みの展開につながる発言もあった。地域に根ざした学びから見つけた課題を、より広い世界における事象と関連づけ思考し、再度地域の課題を解決していく一連の流れを子どもたちの学ぶ姿と重ねて報告することができ、参加者の認識をより深めることにつながった。

また小中高一貫教育研究発表会においては、中高の教員が連携しアクティブラーニングの授業を提案した。中学1年生と町内の府立高等学校1年生がともに学び合い、課題を解決していく授業は、これまでの実践や研究の積み上げがあり参加者からの評価も高かった。

②地域の事を学び、地域の行事に参加しながら、地域の一員であることを自覚させること

・地域の方々との協力を得て(学校支援地域本部を活用)グローバル能勢(能勢のふるさと学習)の授業を展開する

・すべての教職員が旧小学校に所属し、児童生徒・保護者とともに地域の様々な活動に参加する。

次代を見据え、地域社会から国際社会に生きる持続可能な社会の形成者として必要な資質の基礎を養うことをめざし、グローバル能勢の実施を推進した。まず学校教育課課長が地域の方と教員をつなぐパイプ役となり、地域の郷土史研究者や学識経験者とともに授業を展開することは、子どもたちの姿とおして、教員はグローバル能勢についての認識を深める機会となった。またふるさと「のせ」に対する理解と愛情を育むことで「のせ」のよさを継承し、体験的な活動や探究的な学習を通して、よりよく問題を解決する能力と協働的に取り組む態度の育成につながる授業実践について定期的に研修を実施した。研修会では実践交流と共に計画を立てる時間を設けた。見通しをもち具体的に計画を立てる機会となり、研修後の実践をより充実した内容で実施することができた。

また校務分掌表において、旧小学校区と連携する担当教員をおき、担当となった教員を中心に、子どもたちに地域の行事に積極的に参加するよう働きかけをした上で、行事に参加した。全国学力・学習状況調査における質問紙の「今住んでいる地域の行事に参加していますか」の肯定的な回答、小学校：84.2% 中学校：69%であった。今後の研究における指標としたい。

③地域の願いに応える学校運営をすること

・学校支援地域本部事業を活用して、地域の方々の力を学校に生かし、チームとしての学校をめざす。

・学校運営に関し、学校に参画していただく方々の意見を取り入れ、コミュニティスクールをめざす

地域の方を講師として招き、子どもたちの豊かな教育活動の実践を推進した。生活科の時間において、1年生：「むしやとりをみつけよう」2年生：「まちたんけんにてかけよう」「浄るり『語り』体験」「冬のおまつりを体験しよう」「冬をいただく『豆腐作り』」総合的な学習の時間・社会科において、3年生：「ふるさとの『お宝』をみつけよう」「ふるさとの仕事を調べよう」「むかし調べ」4年生：「守りたい能勢の自然」「わたしたちの願いとくらし」「守りたい環境」5年生：「いただきます能勢」能勢の農業「ものづくり能勢」6年生：「歴史の中の能勢」「能勢の平和」「人形浄るりに親しまう」以上、各学年において地域の方を講師として招き、授業をおこなった。副読本「ネイチャーブック」においては、実践を通して積極的に活用した。また能勢の自然に続く副読本として、能勢の歴史や文化についても、専門的な知識や豊かな経験をされている方などのサポートを受けながら、小学校高学年から中学生にも活用できるガイドブックを作製している。

エ. 統合を契機とした魅力的な学校づくりに関する先進的な取組みに関する研究

① 能勢町スタンダードの授業を小中全教職員共通認識の上、実践する。

・小中全教職員で実施する能勢町授業スタンダードにもとづく研究授業を年3回実施する。

年に3回という形式ではなく、小中各教科部会を通して、教科毎に研究授業を実施した。研究授業を実施することで、授業スタンダードにおける教員の認識も深まり、実践が広がっているが、授業スタイルの段階で研究がとどまっている現状もある。『なぜ、授業スタンダードを展開する必要があるのか』ということに焦点をあて、協議を重ねる必要性を感じている。今後授業スタイルから本質の授業改善につながることを期待している。

・様々なメンバー(学年別・教科別等)による研究授業を3年間で一人1回は実施する

小中各教科部会・フレッシュ研修(経験年数5年目までの教員対象)・小中高一貫教育研究発表会等さまざまな機会において研究授業を重ねた。特に、フレッシュ研は授業づくりをテーマに8回実施し、経験の浅い教員が互いに学び合いながら授業をつくる過程に重点を置き進めた。小学校においては、経験豊かな教員による日常の授業指導も充実した内容で進めることができ、個々の教員に授業力が確実についてきている。中学校においては、先進校への視察を実施したことは、授業研究に組織として取り組むベースづくりにつながった。

・効率的な学習方法を提示し、意欲的に学習に向き合えるよう、児童生徒を支援する

「秋田県由利本荘市・東成瀬村」への視察を教員にねらい・視察における重点などを示した上で実施し、視察後参加者はレポートの提出及び、視察研修報告会を企画実施した。報告会は、小中全教員対象におこなったので、魅力的な学校づくりについて認識が深まり、取組みを実践する意欲にもつながり、授業改善だけでなく学校内の掲示物にも変化が現れている。またUDの視点を取り入れた授業づくりについて、プール学院大学 石塚謙二教授を招聘し、授業のユニバーサルデザインと合理的配慮～インクルーシブ教育システムの充実を目指し～をテーマにご講演いただいた。すべての子どもたちが「わかる、楽しい!」と思える授業づくりについて、学習におけるつまずきに気づき、支援する具体的な手立てや、授業UDについて認識を深めた。

② 学習方略の研究をし、一人ひとりの学び方を支援する。(アフタースクールの小学校自習教室、中学校自立学習につなぐ)

・家庭学習の手引きを改善充実する

家庭学習における手引きは、開校むかえるにあたって先進校の手引きを参考に、プロジェクトチームにおいて検討し作成したものを、再度研究部で見直し各児童生徒に配布した。全国学力・学習状況調査における質問紙の「家で学校の宿題をしていますか」の肯定的な回答、小学校：96.5% 中学校：86.6%であった。それに対して「家で学校の授業の予習をしていますか」の肯定的な回答、小学校：35.1% 中学校：26.8% 「家で学校の授業の復習をしていますか」の肯定的な回答、小学校：40.4% 中学校：46.4%であった。自ら学ぶ姿勢においては課題が残る。今後も学ぶ姿勢の育成をめざす家庭学習の手引きの改善充実を進めたい。

・タブレット型パソコン等の活用方法について研究する

教員に一人に1台タブレット型のパソコンを配置した。研究授業においては、タブレットを効果的に活用することに特化した内容で研究協議をするなど、ICTの効果的な活用方法については、実践と共に認識が広まりつつある。

また「筑波大学附属小中学校」(全国授業UD学会研修)研究会への5名の教員の参加や、その後実施した授業づくり研修(UD授業について)は、タブレットを活用し、UDの視点を取り入れた授業が日常的に実践されることにつながった。

③ ICTを活用した魅力ある授業を展開する。

・グループ学びでの活用方法について研究する

・一人ひとりの学びでの活用方法について研究する

大阪府豊能地区(豊中市・箕面市・池田市・豊能町・能勢町)における小・中学校初任者を対象とした研修において、小中学校から4名の教員が情報教育・ICT機器を活用した授業を公開し、その後研究協議をおこなった。グループで学ぶ過程においてICTを効果的に活用し、よりグループにおける学びが深まるよう工夫された授業や、ICT機器を活用し視覚教材を効果的に使い、子どもたちが能動的に学習課題に取り組む授業を提案した。これまでに、様々な教科において、授業の課題や流れを明確にすることや、課題への興味づけ等に、ICTを日常的に活用し研究に取り組んできた成果が現れていた。

(2) 成果物等

- ・小中高一貫教育研究発表会冊子
- ・グローバル能勢カリキュラム
- ・グローバル能勢の実践記録（通信）
- ・「秋田県由利本荘市・東成瀬村」の視察研修レポート
- ・「秋田県由利本荘市・東成瀬村」のコミュニケーションカード
- ・「授業づくり研修」コミュニケーションカード
- ・授業指導案（ICTの活用）
- ・家庭学習の手引き
- ・授業観察シート
- ・6年生学習発表会台本「それはふるさと～ささゆり創生～」

(3) 今後の取組予定

研究タイトルである『次代の能勢を担うグローバル人材の育成～「自分が好き！」「仲間とともに！」「夢いっぱい」の子どもの育成をめざして～を柱に、小中の連携をより密に、また町内の府立高校ともこれまで以上に連携し、12年間をつなぐ教育の研究を進めていく。効果的な小中高連携のあり方を軸に、思考力・表現力の育成をめざす授業づくりについて研究を進める。また、グローバル能勢においては、小から中への接続、高校へも視野を広げ研究を進める。取組みが推進できるよう小中高の合同職員会議や、合同授業研究会等を実施し、12年間を見通し子どもたちの学びを確実につないでいくことを基盤に、日々の教育活動に取り組む。1年目は開校にあたり、研究を深めていく上で困難さもあつたが、2年目をむかえ地域とともに歩む魅力ある学校をめざし取組みを積み上げていく。